

Lesson 11

Children's Forest Program

— 子どもたちのとりくむ植林活動



静岡県私立オイスカ高等学校

林 久美子

1. What is Children's Forest Program?

New Edition Surfing 英語 I の教授資料では「子供の森」計画（以下 CFP）を『オイスカが 1991 年に始めた緑化運動。発展途上国の子どもが主役となって学校単位で参加するユニークな森作り。子どもたち自身が学校の敷地などに木を植え、育てることで「自然を愛する心」、「緑を大切にしている気持ち」を養いながら、地球環境に貢献している…』と 5 行で簡潔に説明している。今回はその 5 行に隠れた子どもたちのいきいきとした姿や彼らが育てている森の様子をお伝えしたい。

2. CFP の舞台

現在、フィリピン、タイ、バングラデシュ、フィジーなどアジア太平洋を中心とする 26 の国・地域の 3,797 校が CFP に参加。その多くは都市から離れた田舎にあり、パソコンどころか電気がない学校もめずらしくない。水道もない。教科書も足りない。校舎には壁がなく、天気の良い日は校庭に机を並べて授業をする学校もある。ないものばかりが目立ち気の毒に思ってしまうが、子どもたちの笑顔にくもりはなく、日本の子どもよりずっとはつらつとしている。

3. 子どもたちの笑顔のわけ

子どもたちは、植林作業中も明るく楽しそう。そんな様子をニュースレターで目にした本校の生徒の中には「やらせだ」と心無いことを言う者もいる。暑い中、木を植えるなんて誰も好んでやるわけがない、無理にやらされているに違いないと。

そんな生徒の思いが出ている作文を紹介したい。本校は CFP を推進している NGO オイスカが設立した高等学校で、2 年次には全員が 2～4 週間の海外研修にでかけて CFP に参加する。これは、

そのときの経験を書いた作文である。

「私は、インドネシアで、子どもたちと植林を体験してきました。行く前は本当に成果が出ているのだろうか、子どもたちは嫌々参加しているのではないだろうかと不安に思っていました。しかし、実際は全く逆でした。彼らは、植林地の急な斜面をもすごい速さで駆け上がり、苗木を植え、へとへとになっている私のところまで勢いよく降りてきて苗木を受け取り、また登って木を植えているのです。しかも笑顔で！その積極的な姿勢と、輝いている笑顔に安心すると同時に励まされ、これからも積極的に子どもたちの活動を支援しようと思いを新たにしました。」

ここにあるとおり、子どもたちは嬉々として活動している。「地球環境のため」という義務感ではなく、自分たちの木陰を、涼しい遊び場を作りたいといった純粋な気持ちで参加しているのだと思う。入学後に植えた木は、2 年生になると背丈を追い越し、5 年生になる頃には木登りができる木に成長する。

木を植えるのは簡単だけれど、水をやり、草をとり、牛やヤギから守り…といった世話がたいへんなため、CFP では、子どもたちが責任を持って育てられるようひとり 1～3 本程度しか植えないことにしている。それでも水道がない環境で水やりを毎日やるのはたいへんなことだ。じょうろなども支援しているが充分ではなく、タイでは、穴が開いたビニール袋でため池から水を運んでいる子どもの姿が印象に残ったし、フィリピンでは、家から 1 ガロンボトルで水を運んできた子どもに出会った。

子どもたちは、実感を伴わない「地球のため」「環境のため」の森づくりではなく、涼しさや楽しさ

が実感できる「自分のため」の森づくりをしているからこそ純粋に楽しみ、笑顔がはじけ、木に愛情を注げるのだろう。

さらには、自分の木を育てることは、責任感を育てることにつながると先生がうれしそうに話してくれた。怠学傾向にあった子どもが木の世話をするために朝早く登校するようになったという報告も聞いた。そして、今まで生活のために森の木を切ってきた地域であっても、子どもたちが大事に育てている木を切ってしまうと考える大人は一人もいないのだということも。

4. 主役は子どもたち

実は、CFP をスタートさせた理由はそこにあった。もともと、オイスカは、1970年代からアジアの国々に農業技術員を派遣し、現地青年への研修を行い農業普及員等のリーダー育成をしていたのだが、森林破壊の影響で農業に必要な水の確保が難しくなるという問題が出始めたのが1980年頃。山に木を植えないければ、と考えたスタッフたちがその必要性を訴えたが、食うや食わずの村人たちが、すぐに成果が見えるわけではない植林に積極的になれるわけがなかった。そこで考えられたのが、村の拠点である学校で、村の共有財産となる森を子どもたちの手でつくるCFPだった。

大人たちは主体的なかわりはできなくても、子どもたちの活動には、協力をしてくれる。大きな柵の設置など、難しい作業をお父さんたちがしてくれるようになり、そういう作業をくり返して行くことで、CFP以外にも学校や地域の奉仕活動も盛んになったという事例も報告されている。子どもたちの純粋な心と行動が大人たちを動かしていったのである。

5. 子どもの森は村の森

森づくりと言っても、学校によって条件が違うため、できあがった森もさまざま。例えば、沿岸部の学校では、海岸線にマングローブを植え、漁場として、あるいは防波林として有益な森を育てている。フィリピンのある学校で見た森は、まる

でプランテーションのように木が等間隔で植えられていた。実は、その地域では何十年も前に森がすべて失われ、本来の森を知っている人がいないのだという。一方、スリランカの比較的緑が残っている地域で見た森は、庭園のようだった。いろいろな種類の木があちこちに植えてあった。どちらがいいということではない。何よりも森を作った人たちがその森を大切に活用してくれることが重要だと考えている。だから、CFPでは、木を切るなどと言わない。切っても新しく木を植え、上手に森を活用していけるならそのほうが望ましいと考えるからだ。実際、切った木を学校の補修に使ったり、切ったスペースに今度は実のなる木を植えて新しい楽しみを作り出ししたりしている例が報告されている。「環境のため」は副次的なことで、子どもをはじめとする地域の人たちが、森からの恩恵をしっかりと受けられることこそ「子供の森」計画がめざす森づくりなのである。

6. 最後に

生徒の作文の最後に「これからも積極的に子どもたちの活動を支援しようと思いを新たにしたい」とあるが、実は彼女は本校が進めているベルマークによるCFP支援活動の責任者。ベルマーク100点で苗木が1本支援できる仕組みで、本校は、昨年度苗木8,000本分の支援をすることができた。CFPを支援することで、現地の子どもたちに励まされることも多いと思う。支援の輪が広がっていくことを期待している。

